2020 年度　優秀卒業論文表彰式

2021 年 3 月 25 日、経済学部第一会議室において優秀卒業論文表彰式が行われました。優秀論文４本と最優秀論文の執筆者に賞状と副賞が授与されました。

前列左より、森本さん、中井さん、岩永さん、大堀さん

後列左より、広田副学部長、倉上経和会副会長、内田先生、遠藤先生、丸茂先生、宇田川先生、結城先生、禹学部長

最優秀論文賞（経済学会賞）

岩永幸大（丸茂ゼミ）

「ETF 買い入れ政策が東証一部上場銘柄のボラティリティへ与える影響」

【概評】

本論文は、日本銀行の ETF 買い入れ政策が東京証券取引所第一部に上場している個別銘柄のボラティリティに与える影響を検証するものである。

日本銀行の説明では、2010 年 10 月に包括的金融緩和政策とともに導入された ETF 買い入れ政策の目的は、各種リスクプレミアム（価格変動リスクと流動性リスク）の低下だとされている。しかし、リターンとリスクが正の関係にあるとすれば、日本の銀行の買い入れ政策がリスクプレミアムを上昇させる可能性がある。そこで本論文は、日本銀行の ETF 買い入れが翌日のボラティリティにどの程度の影響を与えているかを EGARCH モデルのパラメータを推定することで計測している。その結果、多くの銘柄で、ETF 買い入れの翌日にボラティリティが高くなる傾向が明らかにされた。個別銘柄のリスクがボラティリティに

反映されると考えると、ETF の買い入れは短期の取引におけるリスクを高めているといえる。

本論文の独創性は、日本銀行の実施している金融政策が、政策目的に沿った帰結を導いているのかについて、ETF 買い入れ政策に着目して丁寧に検証している点にある。先行研究の蓄積をきちんと踏まえたうえで、仮説を検証する手堅い手法が評価された。検証を通じて、一部の金融政策がリスクを増大させていることを示し、日本銀行の金融市場への介入が過剰であるとの示唆を引き出している。また、EGARCH モデルのデータセットの作成にも努力の跡がうかがえる。

以上の検証結果にたいする理論的な考察や評価にはもう少し踏み込んでほしいところがあるものの、卒業研究論に期待される水準を大きく超えるものと評価しうることから、優秀論文選考委員会は本論文を令和 2 年度最優秀論文として選定した。

優秀論文賞（経和会長賞）

菊地悠太（高端ゼミ）

「岩手県奥州市市立病院を事例とした公立病院のあり方に関する考察」

【概評】

本論文は、少子高齢化が進展する社会のなかで、持続可能な地域医療体制とはどのようなものかを明らかにするために、国による公立病院の位置づけの変化や岩手県奥州市の市立病院の事例調査からその諸課題を炙りだし、検討している。

本論文の優れている点は、公立病院が直面している諸課題を、地域医療体制における公立病院の役割や存在意義、経営原則、財政措置等を客観的な資料に基づいて丁寧に調べ、総務省による公立病院改革や厚生労働省による地域医療構想の展開について整理するなかで浮かびあがらせる、極めて慎重な分析アプローチにある。さらに、奥州市立 2 病院のヒアリングを通じて、地域の実態に即した課題が、医師の確保と地域包括ケアへの対応にあることを明らかにしている。以上のような周到な調査が本研究の独自性の構築に十分な貢献をなしていない点に課題を残すものの、具体的事実に即して論理を展開し、問題を発見する手続きは高く評価しうる。

優秀論文賞（経和会長賞）

森本拓見（内田ゼミ）

「非集住地域における多文化共生の未来-埼玉県秩父地域の外国人住民の実態調査から-」

【概評】

本論文は、日本の外国人非集住地域における「多文化共生」の実態を関係者への聞き取り調査から把握し、そこから見えてきた課題について、集住地域とは異なる、地域ごとの特色に合わせた取り組みが求められることを指摘する。地域を在住外国人の在留資格をもとに「技能実習」などが多い「就労型」、「日本人の配偶者等」が多い「生活基盤型」、「留学」が多い「就学型」と分類した上で、生活基盤型地域には言語の支援が求められる一方、就労型地域には外国人を社内コミュニティで完結させず周辺地域への参画を促す仕掛けが必要と

いう。

本論文が優れているのは、周到に調査対象を選定し、その対象となった横瀬町、秩父市では自治体側への聞き取りに加え、複数の受け入れ企業や在住外国人へも個別に聞き取りを行い、それらのデータから立体的に実態を描き、課題を抽出しているという実証部分にある。特に多文化共生をテーマとした既存研究が少ない外国人非集住地域を扱うことで独創的研究となっている。欲を言えば現行の「多文化共生」の定義を無批判に前提とするのではなく、本研究の成果を踏まえて再検討する議論が欲しかったが、独自の実証に基づくストーリー性ある論文として高く評価された。

優秀論文賞（経和会長賞）

中井多歌良（遠藤ゼミ）

「オンラインギグエコノミーがもたらす労働者へのリスク」

【概評】

本論文は、短期間の仕事をインターネット上のプラットフォームを介し、雇用関係を持たずに受発注するオンラインギグエコノミー（OGE）の拡大をもたらした背景と、OGE 従事者が直面するリスクの位置づけについて、Uber Eats の配達パートナーを主な事例に考察するものである。

OGE は新たな現象であるうえ、実態や全体像を把握しにくい。本論文は英文を含む先行研究、二次資料、事例調査等を丹念にサーベイし、分析対象を丁寧に定義付けたうえで、実態と課題の把握に努めている。日本の雇用や社会保障等の制度的特質を踏まえ、OGE が政府、企業、労働者それぞれから「複業」として求められる現状と、その結果「孤独なまでの」個人化やリスクの自己責任化が労働者の自発性にも後押しされて加速する構図を描き出す。そして、労使双方の「可動性」の高まりにより各経済主体がごく短期間「点的」に繋がる不安定な社会への変化を、ジグムント・バウマンによる「リキッド・モダン」の議論を援用して「気体的社会化」と表現する。こうした考察を踏まえ、コロナ禍による OGE の一層の拡大に対し、問題提起を行っている。

本論文は公刊された資料に基づく情報の整理と考察が主であるため、指摘される事実や問題点の一つ一つは既知のものが多い。しかし、それらを論理的に深く考察し、独自の概念の提示に繋げた議論構築過程が高く評価された。

優秀論文賞（経和会長賞）

大堀慶裕（宇田川ゼミ）

「近代起業家の芸術文化支援との比較に見る現代企業メセナの継続性の限界―新制度派組織論的アプローチ―」

【概評】

本論文は、日本企業における企業メセナ活動がなぜ継続性を持たないのか、という点について、近代起業家の芸術文化支援と比較しながら、新制度派組織論の観点から考察を行ったものである。

日本では、1990 年代から企業メセナ活動が盛んに展開されたが、近年こうした活動は徐々に減少している。かたや、日本の近代化期に展開された芸術文化支援は、確固たる定着を見せている。この差異について、本論文は、現代企業メセナを制度的環境における模倣的活動であり、制度的環境に対する適応の一種であるとした。その一方で、芸術文化支援を、制度的環境を独自に構築する活動と解釈し、次世代の経営者が先代の活動を模倣するだけでなく独自に活動を構築したことが、その定着につながったと述べている。

芸術文化支援と企業メセナという曖昧な概念について、先行研究を丹念に整理しながら定義を行い、両者の特質の相違を明らかにしたことには意義がある。また、メセナを一制度と捉え、それが継続性を持たない要因について、新制度派組織論の観点から分析を行っていることにも独創性が認められる。課題として、芸術文化支援の特質及びその継続性要因を明らかにする上で 2 つの事例は必要十分か、新制度派組織論を企業メセナに適用する妥当性等が挙げられるが、以上の点から本論文は高く評価できるものである。